

古河原 泉

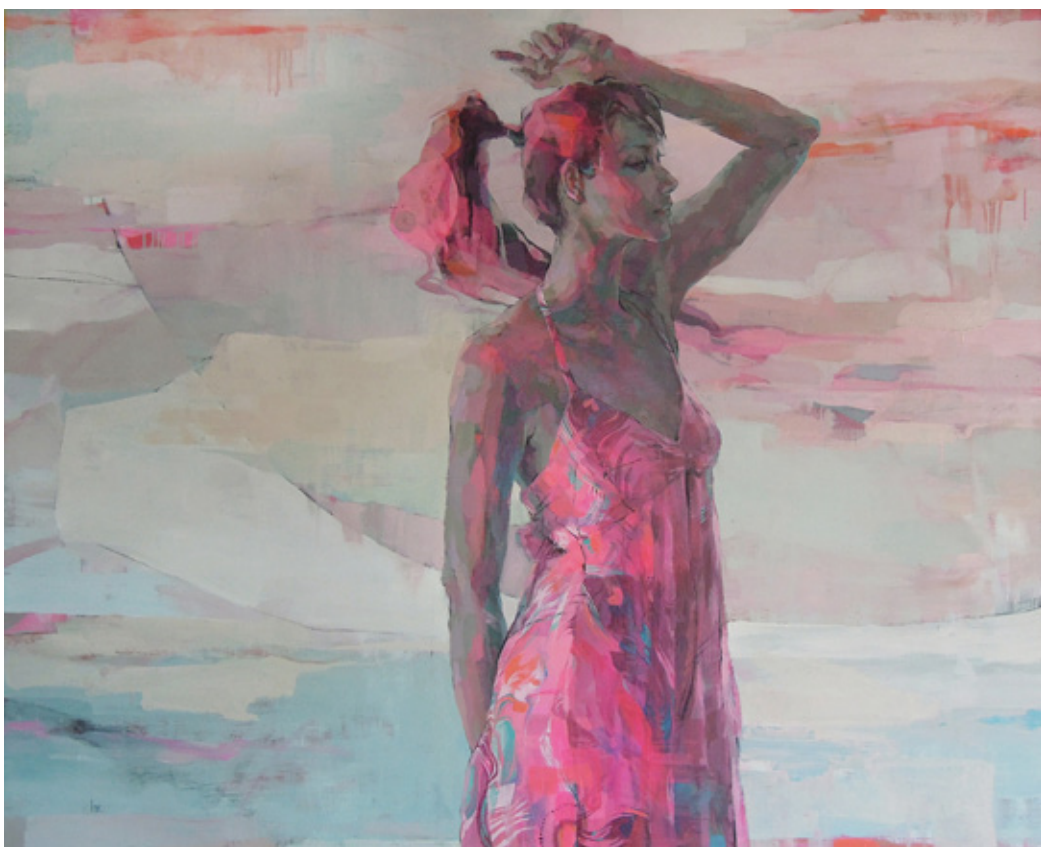
内面に渦巻く感情や
エネルギーを掬いとる



「追っているよ」2016年 油彩、キャンバス 45×38cm



「追っているよ」2016年 油彩、キャンバス 60×30cm



「華くぐり」2013年 油彩、キャンバス 130×162cm



「惟う(おもう)」2015年 ミクストメディア(木炭・パステル・鉛筆・アクリル・水彩)、紙 38×53cm



こがはら・いずみ
栃木県宇都宮市生まれ。2000年宇都宮大学教育学部美術科卒業。同年、栃木県芸術祭奨励賞受賞。03年から光風会に在籍、04年日展に初入選、以降07年から13年まで7回入選。2013年初個展(Bunkamura Box Gallery)。その他、有名百貨店、ジ・オブセッションギャラリーで個展開催。現在無所属。

取り扱い画廊/アートオブセッション
作品購入の目安/要問い合わせ

近頃、色彩の美しさがとくに際立っている古河原泉の女性像。暖色系から寒色系まで、どんな色彩でも使いこなすことで、時に甘美に、時に瞑想的に、またある時は情熱的に……と、豊かな表情をみせてくれる。

「色彩を新鮮で生きたままの状態で使いたいという表現欲があります。そのため、混色したりぼかしてやわらかいグラデーションを作るのではなく、置いた色そのまま隣の色と共存・調和させようとする表現に至るのです。自分の感覚的に、ただ心地よいと感じる線を描き、心地よいと感じる色をしかるべき場所に置いていきたいのです」古河原の手にかかる人肌がいかなる色に彩られても違和感がない。

古河原にとって作品は、あらか

じめ計算された作業の結果ではなく、瞬間の発見や心の機微を定着させる行為である。作品は、「生きている」過程を生き生きと映し出すスクリーンなのだ。

女性像は初期から一貫するモチーフだが、それに対する視点も感じ方も、年齢や環境とともに必然的に変化してきている。

「沸々と湧き出るありのままの内面をストレートに主張する時期、人との関わりの中で、許し合ったり認め合うことを静かに受け入れる時期——。人はさまざまな時期を経る中で、変わらない部分は『芯』です。どんな人でも芯(あるいは核)がある。それを強く自覚している人もいれば、環境に飲み込まれて見失いそうになっている人もいる。だけど、どんな人の中にも必ずそれは存在すると、私

は感じているし、そうでありたいと思うのです」

彼女の大学時代の卒業制作「つちくれ」は、画面の中心に屹立する裸婦像を、ざらついた質感の絵肌とモノクロームの色調で描いた情熱のこもった作品で、彼女にとって記念碑と言うべきものだ。ドイッのアウシュヴィッツ収容所での体験記『夜と霧』に衝撃を受けた「人間の存在とは？」という問いかけを、キャンバスに思い切りぶつけたというもの。それは彼女の画家として生きていくことへの意思表明とも言える作品だった。

そこから現在までに、色彩の数は格段に増え、絵肌も洗練され、デッサン力も磨かれた。しかし画面の奥底にある、人間に対する探求心、そこに迫ろうとする欲望の深さは変わっていない。

「女性に限定して描くつもりはありません。人の体に滲む内面を表現しようと思うと、自分自身が女性であるから、表現・投影する媒体が女性になる。しかし今後は、女性に限らずに人物やそれ以外のモチーフにも、興味の域が広がりが変化していくものと感じています」

そのきっかけの一つとして、現在、バレエ・ダンサーを描いている5月にはその新作発表となるグループ展も開催される。今後の展開を期待したい。

Information

個展(4/6~12・仙台三越[作家来場日4/9・10])、個展(2/24~29・名古屋栄三越6階 アートフェスティバル2016内)、
「若き才能が描くバレエダンサーたち」(5/11~17・池袋西武 6階 西武アートフォーラム)